

平成 22 年 4 月 10 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007 ～2009

課題番号：19520075

研究課題名 (和文) コペ・グループの思想史的研究：独仏交流による 19 世紀思想史

研究課題名 (英文) Reseach on the Coppet Group in the context of history of social thought.

研究代表者

安藤 隆穂 (ANDO TAKAHO)

名古屋大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：00126830

研究成果の概要 (和文)：コペ・グループの思想について、バンジャマン、コンスタンとスタール夫人 (ジェルメーヌ・ド・スタール) への、英仏自由主義 (スミスとコンドルセ夫妻) の影響、ドイツ哲学と文学の影響を明らかにした。フランスにおける自由主義の成立過程、ドイツにおける自由主義の胎動過程を示し、また、仏独思想史における自由主義の成立について、コペ・グループの果たした大きな貢献を示すことができた。

研究成果の概要 (英文)：Our research has cleared that the thinkers of the Coppet Group, especially Benjamin Constant and Mme de Stael are much influenced by English and French liberalisms, particularly, Adam Smith and Condorcets, and also influenced by German philosophy and literature. So it is cleared the history of the formation of French and German liberalisms and Coppet's contributions in the context of its process.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・社会思想史

キーワード：社会思想史、自由主義、公共性

1. 研究開始当初の背景

(1) フランス自由主義の研究は、フランス革命以降に研究が集中し、さらにトクヴィルを焦点に展開してきた。先行者としての B. コンスタンの研究もそれほど盛んではない。本研究は、そのコンスタンとスタール夫人

を中心に集合したコペ・グループの思想をフランス自由主義さらにはヨーロッパ自由主義の発展というコンテクストに位置付ける試みである。そのためには、フランス革命以前のフランス自由主義の動向も視野に入れた思想史的コンテクストの再検討

も必要であるが、この点はさらに研究が遅れている。このような現状の中で、私は、フランス自由主義研究の欠落部分として、コンドルセとその周辺を中心とした研究に一定の成果を上げていた。この時点での到達点は、安藤隆徳編『フランス革命と公共性』（名古屋大学出版会、2003年）および、平成16年度・平成17年度・平成18年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告、安藤隆徳『フランス「公共経済学」の成立—フランス古典派の展開と公共性』（2007年3月）に、示されている。それは、18世紀啓蒙の枠組みでコンドルセが用意したフランス自由主義の枠組みがフランス革命を通じ発展し、一方でイギリス自由主義に対する独自の性格を明確にするとともに、他方で、大陸の諸思想と交流し大陸自由主義としての性格を持ち始めるというものであり、その枠組みを左右するキイ概念は公共性にあるということであった。

- (2) このようにして拡大した視界を、フランスとドイツ思想の交流点として、コペ・グループに着目し、独自のフランス自由主義の発展のコンテクストを発掘し、これをさらに独仏交流を軸とした大陸思想史の地図に位置付けるという課題へと展開しようという見通しを得た。
- (3) 自由主義思想史に関連付けるという点ではコペ・グループの研究が遅れており、先駆的研究としてスタートすることになった。コンスタンについては政治思想史のアプローチと文学的アプローチによる研究が進んでいるが両者は必ずしも関係づけられていない。スタールについても、文学的研究が中心であって、しかもその研究視点もあまりに多様である。コペ・グループには、さらに、シスマンディなどの経済学、シュレーゲル兄弟等によるドイツロマン主義の影響が大きい。これらも、自由主義思想史にどう組み込むか極めて困難であった。
- (4) 思想史的影響関係でみると、あまり知られていないが、コペ・グループへのアダム・スミスの影響は大きく広範に及んでいる。スミス思想あるいはスミスの自由主義の大陸への伝播を視野においてみると、フランス自由主義の発展と大陸での自由主義拡大の思想私的コンテクストが浮かび上がり、かつコペ・グループにお

ける独仏交流を介した大陸自由主義の興隆という新コンテクストも見えるのではないかとの見通しをつけた。

2. 研究の目的

- (1) フランス自由主義の発展上にコペ・グループを捉える。フランス自由主義の独自の性格をより明らかにし、特にキイ概念としての公共性の意義を明らかにする。それが、フランス自由主義が、大陸においては、イギリス自由主義に対峙する独自の自由主義の発展を促したことを示すという見通しに立つ時、なぜ、フランス自由主義がその一つの基軸集団をスイスのコペにおいて出現させたかを、したがって、フランス自由主義の発展上にコペ・グループを位置づけることを可能にする。
- (2) 底流としてイギリス自由主義とアダム・スミスのフランス自由主義およびコペ・グループへの影響過程を把握する。フランス自由主義の発展の基礎に、スミスの自由主義の屈折と展開というコンテクストがあることを発掘・確定し、思想史的統一的コンテクストを提起する。
- (3) 独仏思想交流を明らかにする。フランス自由主義は、その発展において、なぜドイツ思想の吸収を必要としたのか。コペ・グループの思想活動をこのような視点から解読し、独仏思想交流の新地図を提起する。
- (4) 以上の観点より、コペ・グループの思想を、個別思想家、特にコンスタンとスタールを中心に分析し、グループ内部の思想的対立を含め、グループとしての自由主義思想の枠組みをも解明する。

3. 研究の方法

- (1) スミスがどう読まれたかを基準の一つとする。コペ・グループは、スミスの『国富論』を受容し、分業論を基軸として近代社会分析を行うという共通点を持つ。さらに、分業社会としての近代社会において近代的個人が独立しうる論拠として、あまり知られていないが、スミス『道徳感情論』を援用していた。このようなスミス受容は、直接スミスを読むことによってではなく、コンドルセ夫妻のスミス受容を前提とし、そのスミス理解の枠組みを継承している。したがって、コペ・グループによる

スミス受容は、コンドルセ夫妻からコンスタンとスタールを中心とするコペ・グループへのフランス自由主義の発展というコンテクストを確立することにつながるという見通しが立てられる。

- (2) 政治思想としての自由主義という狭いコンテクストではなく、経済から文学まで、幅広い分野を視野に、考察する。フランス自由主義は政治思想史の視点によって研究されているが、とりわけコペ・グループにおいて、政治思想も政治思想としてよりも文学的施策として屈折してあらわれる。したがって、政治思想文献に偏ることなく、当然とはいえ、経済、文学分野の文献すべてを解読し、自由主義文献として統一的に読みうる視点を確立する。

4. 研究成果

- (1) コペ・グループの思想活動に至るまでの、英仏自由主義の交流が明らかとなった。イギリス自由主義の一つの思想的到達点としてのスミスを、コンドルセ夫妻が、公共圏の観念を拡大し受容したことは、本研究の前提としていた。今回、この公共圏の観念が、コペ・グループにおいて、さらに屈折・展開し、文芸の公共圏という名の政治空間の設計の思想となったことを明らかにした。
- (2) この場合、特に、スミスの『国富論』が、特に第5編を中心に公共性の理論として再解釈されるというその受容の形態を明らかとし、また『道徳感情論』受容の必要性、受容の論理も示すことができたと考ええる。
- (3) 政治空間としての公共圏が活発に機能する上で、文芸の自由と文芸の公衆成立の形態が決定的に重要であると、コペ・グループは考えた。コンスタンはドイツ悲劇の分析によって、作品内部＝舞台でのモラルの成立が脇役同士の同感による相互交流によって可能となり、これを受け取るという形で公衆が生まれると見た。この文芸の公衆の成立が政治的公共空間において世論から公論が生み出される仕組みのモデルと考え、このような文学的ドラマトゥルギーを持つ世論空間の樹立が近代の自由主義と民主主義の死活問題と考えた。このように『道徳感情論』の独自の読解を近代政治秩序の樹立の論理へとコンスタンは展開したのである。以上の、コンスタンの思想の枠組みを、スミス読解の経緯を含めて明らかにしえたと考ええる。この枠組みは、スタールとの

共通のものであり、またシスモンディの経済学との相互規定関係も示すものでもあり、コペ・グループの共通枠組みに他ならない。特にスタールについては、コンスタンとの関係も含め、彼女独自の思想形成過程に即して、再構成を行った。

- (4) 以上に明らかなように、コペ・グループは独自のスミス読解をドイツ思想の新しい動向を組み込み援用した。すなわち、スミス『道徳感情論』の同感の道徳哲学に、ドイツロマン主義の感情主義を組み込み豊かにし、大陸自由主義の政治思想の主体的枠組みを生み出したのである。
- (5) 普通コンスタンとスタールはフランス近代への挫折の意識においてドイツロマン主義を受容しフランスに持ち込んだとされる。しかし、今回の研究の結果、フランス自由主義がその独自の枠組みを豊かにする上でドイツロマン主義を吸収したという側面がクローズ・アップされ、スミス道徳哲学のフランス的受容とドイツロマン主義の交錯という独仏思想交流のコンテクストをも発掘できたと考える。
- (6) コペ・グループがフランス自由主義において占める独自の位置を明らかにしたことによって、コンドルセを起点とするフランス自由主義の独自の性格を一層明らかにしえた。フランス自由主義は、個人の自由を重視し、功利主義がその個人の自由を害するとし、独自の道徳思想を樹立した。その際、コンドルセ夫妻経由でスミス『道徳感情論』を受容した。その独自の読み方により、自由主義における公共性の意義を開拓し、思想と文学が公共性発展に寄与する点を軸に独特の政治的自由論を展開した。この発展上にコペ・グループは登場しえたのである。
- (7) コペ・グループは、文学と政治の結合という問題において、ドイツ哲学と文学を吸収援用した。この点に光をあて、文学と政治の交錯という視点によって、19世紀初頭の独仏思想交流の動向が理解しやすくなったと考える。たとえば、スタール夫人の『ドイツ論』はよく知られているが、本研究では、これを文学書としてではなく、コンスタンのドイツ文学の分析もいかし、スミスとコンドルセの影響を含む、独自の独仏思想交流の形態の上で取り上げたのである。
- (8) コペ・グループによる公共圏設計の思想は、ナポレオン帝政に対する対抗政治思想としてフランス自由主義が成立したことをします。コペ・グループによれば、ナポレオン帝政は世論の圧倒的支持の上に立つ政体である。しかし、この世論は、ナポレオンが巧妙に展開した検閲という装置と人間の無意識に働きかけるイメー

ジ戦略によって人工的に作り出された受動的な世論という幻想にすぎない。世論は国家のイデオロギー諸装置によって規制され受動化している。これに対して、独自の公共圏の設計を通じて対抗して初めて、ナポレオン体制を内在的に批判しうる。このように、コペ・グループは、公共圏を支柱とし独自の自由主義を展開したのである。それは、ナポレオン戦争によるドイツナショナリズムの興隆に対しても、これを自由主義の枠組みに統合し、大陸自由主義としてナポレオン帝政に対峙するという目標を持つものでもあった。

- (9) 以上により、本研究は、続いて大陸自由主義の成立を中心とした研究を新課題として展開するという展望を得た。
- (10) それは、ヨーロッパ 19 世紀思想史への新視角をももたらすものと考ええる。
- (11) さらに、ヨーロッパ思想史という大きなコンテクストで見ると、コペ・グループは、文芸共和国の伝統における最後の首都であったと考えることができる。エラスムス、ピエール・ベール、ヴォルテール、コンドルセを次スタールはヨーロッパ思想集団の交流中心地として、コペ・グループを組織した。この成果に立って、今後、公共圏の思想史を構想していきたい。これが、もう一つの、将来展望である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① 安藤隆穂「コペ・グループとアダム・スミス」『アダム・スミスの会会報』76号、1-7ページ、2009年、査読なし。

[図書] (計 1 件)

- ① 安藤隆穂『フランス自由主義の成立』名古屋大学出版会、V+343+87ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安藤 隆穂 (ANDO TAKAHO)
名古屋大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：00126830